



大阪公立大学共同出版会

ニュースレター

No.16

Osaka Municipal Universities Press (OMUP)

新年のご挨拶



大阪公立大学共同出版会(OMUP)会員の皆様、明けましておめでとうございます。日頃は、当出版会の活動に対して様々なご支援をいただき感謝いたします。

21世紀の幕開けとともに、当出版会は大阪府下の5公立大学の教職員が集まった学術任意団体として発足しました。一方、その後の目まぐるしい大学改革とともに、OMUPは公立大学法人となった2大学、大阪市立大学と大阪府立大学に跨がる共同出版会となり、現在に至っています。さらにはOMUPの正式名称も特定非営利活動法人(NPO)大阪公立大学共同出版会として2年目の年を迎えることになりました。

飽食の時代と同様に飽書の時代と呼ばれて久しい今、若者のみならず中高年の活字離れ・本離れが深刻な状態となっています。一方、読売新聞が昨年の読書週間に行った調査では、「1ヶ月本読まず」が5割という悲惨な結果が出ています。昨今のこのような事態を受け、「文字・活字文化振興法」なる法律が昨年11月に我が国において

施行されました。この法律の前文にも、“文字・活字文化が、人類が長い歴史の中で蓄積してきた知識及び知恵に継承及び向上、豊かな人間性の涵養並びに健全な民主主義の発達に欠くことのできないものである。”と述べられています。知を創造する力や情緒力をこれまで以上に育てなければならない大学、そのような中であって、私たち大学出版会の果たす役割は今後一層大きくなるでしょう。

OMUPに対していっそうのご支援を賜りますとともに、出版会を活性化するための積極的なご意見を賜りますようお願いして新年の挨拶とさせていただきます。

大阪公立大学共同出版会
理事長
三田 朝義

目次：

・新年のご挨拶	…… 1	・韓国・チェジュ便り	…… 3
・両生協にてOMUPブックフェアを開催	…… 1	・今こそ書物の力が必要	…… 4
・OMUPの今後の発展に向けて	…… 2	・新刊書の紹介	…… 4

両生協にてOMUPブックフェアを開催

常務理事 小股 憲明

OMUPの出版活動を周知し、あわせて出版物の販売を促進する目的で、大阪市立大学および大阪府立大学の生協書籍部の協

力を得て、ブックフェアを開催しました。まず2007年11月19日～11月30日のあいだ府立大学生協書籍部において、次いで12月10日～12月21日のあいだ市立大学生協書籍部において、これまでOMUPが出版した書籍のすべてをひとつのコーナーに集めて出展しました。写真は、府大生協での出展の様です。

残念ながら売り上げは僅少でしたが、一定の期間それぞれの



生協書籍部においてすべての出版物をまとめて展示することができたことは、両大学の教職員、学生諸君に OMUP の存在と活動をアピールするうえで、多大の効果があつたものと考えています。ご協力いただいた両生協の関係者に感謝申し上げます。

OMUP の今後の発展に向けて



大阪府立大学
経営情報システム研究所・所長
経済学部・教授 竹安 数博

OMUP にホームページができたとのことで、開いてみると過去の出版実績が掲載されていた。年度別に見ると、

2001 年	1 点
2002 年	2 点
2003 年	5 点
2004 年	3 点
2005 年	6 点
2006 年	8 点
2007 年	11 点

となっている。これを見ると近年急速に出版点数が増大している様子がわかる。

2008 年、2009 年もそれぞれ 10 点前後か、それ以上行くと思われる。というのも筆者個人で関係者に声をかけて、可能性のある分をリストアップしただけで 10 点近くあるからである。堺・南大阪シリーズ関係、大阪市立大学文学部企画シリーズ関係、他を考え合わせると、先ほどの数値となる。

年 10 点発刊は一つの目安と言える。これをコンスタントに出せる力をつけ、さらに一層の発刊点数としてゆきたいものである。

なお、このように発刊点数が増え、また今後ともさらに拡充

するとなると、体制の充実も不可欠となる。現在出版のコーディネートの実務をされているのは、足立常務理事と小股常務理事のお二人である。今までは何とかこなってきたが、今後のことを考えると体制の充実を図る必要がある。

体制充実の狙いとしては下記のような点が考えられる。

- ・編集機能の充実
- ・OMUP 出版体制強化と発刊数の拡充
- ・会計等のダブルチェック体制の強化
- ・負荷軽減と誤り防止
- ・組織的業務遂行

これらを充実させるためには、まず出版の案件開拓と編集コーディネートの役割の常務理事を増やさなければならない。分野別に担当すると業務も効率的に行えるようになる。ざっくり見ると、

- 府大 理系、文系
- 市大 理系、文系
- 外部（府大、市大以外）

の 5 分野が考えられる。

なお、総務関係や会計関係も併行して強化が必要となる。ここ数年を視野に見ると、新しい体制として、従来から携わってこられた方々とのバランスも考慮すると、下記のような体制が考えられる。

<新体制案>

基本担当

- ・専務理事 編集 — 外部（府大・市大以外）、総務総括
- ・専務理事 編集 — 府大・文系、会計総括
- ・常務理事 編集 — 府大・理系
- ・常務理事 編集 — 市大
- ・常務理事 総務 — 総会、ブックフェア、新入生に薦める本 他
- ・常務理事 会計

なお、編集担当は、担当外分野での紹介者となった場合などあるので、この限りではない。あくまで基本分類である。また将来的に、市大は理系、文系に分け増員することが考えられる。総務・会計はダブルチェック体制を敷き事務処理の誤りなどを極力防止できる体制とする。また、将来体制が充実すれば、専務理事は管理職的にチェックのみして実務をしないというのが本来の組織的業務遂行スタイルと言える。

以上、縷々体制の強化案を書いてきたが、この他にも業務の改善もあわせ進めてゆく必要がある。それらは機会があれば、必要に応じ提言してゆきたいと考えている。

関係する人が増えるが、これは例えば、薦める本の執筆者強化にもなる。また OMUP 活動を理解する人が増え、案件掘り起こし拡大にもつながる。輪の広がった、豊かな著作群を擁し、また輩出する出版会たらんことを願っている。

韓国・チェジュ便り

常務理事 足立 泰二

常務の責を全うすることを条件に、2007年4月から1年間、韓国国立済州大学の客員教授を致しております。語学関係は別にして、専門教育で大学院講義およびセミナー担当の日本人と契約を結ぶのは初めてとか。漢拏山(ハルラサンと呼ぶ)、広いキャンパス内にあるゲスト・ハウスで内外の教員スタッフに混じって生活をしています。最もこれまでに7回も一時帰国を果たしており、ほぼ毎月、定例のOMUP常務理事会にはこれまで2回欠席した程度です。もう一人の常務である小股憲明教授の助けがあつてのことではありますが。

さて、ニュースレターにチェジュ便りを書くようにとの依頼を受けて、以下に備忘録風に感じていることを述べます。

某月某日

常に首からつりさげている国際携帯電話から呼び出しバイブを感じた。早速取ってみるとOMUP電話秘書からの要件である。これまでわたしが取り扱ってきた事項なので、即刻東京に電話で用を済ますことができました。そういえば先日も大阪市大の会員の先生からの問い合わせ電話があつた。その先生曰く、国外だとは思わず電話したんです、と。

この頃の携帯電話の機能進化は実にめざましい。国内の番号でそのまま、ちゃんと追っかけてくれるし、もっと気軽なのはEメールだ。写真なども送ってきてくれたりする。ただ、大変なのは充電忘れと月々の支払い料金。電話に出ると即刻受信料を支払うし、韓国国内に電話すれば数倍の料金を請求される。この点、韓国の携帯電話料は国内国際ともずっと割安な料金だ。だから、韓国では車のなかであろうと、会議の途中であろうと、あるいは一緒に食事をしていても、大声で「ヨボセヨ！」(モシモシに相当)。日本で若者が電車のなかで他人耳もはばからず携帯電話で話しているのが気にならなくなった。マナーなんてそんなものなのだろうか。

某月某日

韓国学術振興財団(Korean Research Foundation, 略称KRF)理事長秘書から、オフィスへの電話。許 祥萬(ホ サンマン)理事長が今度、国立済州大学校で講演をし、折角の「韓国のハワイ」チェジュなので、漢拏山(ハルラサン)と一緒に登りたいのだが、都合は如何か、とのこと。即刻OKの返事をした。許先生は私が宮崎大学在任中からの友人で、国際姉妹大学協定を締結した順天大学の総長になられ、私が大阪府立大学に転任後、最初に協定締結を提案された。任期4年の総長を退き、その後大抜擢で韓国農林部長官(日本の農林大臣相当)に就任したひとである。無類の自然派学者であった先生には政治家長官職は激務だったとか、2年程で退任され、現在の財団理事長に就任したという方である。国立順天大学総長時代、姉妹校締結1周年記念事業として日韓国際シンポジウムを大阪府立大学の学術交

流会館で開催した折、5、6名の教授を連れて、日韓学術交流にご尽力頂いたのだった。

後日、済州大学校の講演「これからの大学の進むべき道」は本部講堂に多数の教授陣を迎え、素晴らしいものだった。私への通訳は順天大学から出向している李 度鎮准教授が秘書役で随行してのものであった。その翌日、念願の漢拏山登山となったが、生憎の雨。観音寺登山口まで出かけたが、入山禁止となって、やむなく海岸線ドライブとなった。チェジュの海鮮と「ハルラサン」という銘柄の焼酎で語り合った。後日、私は快晴の韓拏山山頂制覇を果たした。

某月某日

本日、日本語の分かる若いスタッフに案内して貰い、図書館と大学内の本屋に行く。図書館はキャンパス内の1等地、6km先の済州市を眼下に望める所にある。キャンパス自体が広大な漢拏山麓を30年前に切り開いて作られたもの。標高400mのところ。図書館内に入っての驚き。コンピューターに向かっている者、広い机に何冊かの本を開いて勉強している学生、あるいは先生たち。週日と土曜日は午後10時まで、日曜日は夕方5時までの開館で、午後10時の閉館時には大学正門前までスクールバスが運行しているのだという。大学正門前のロータリーは市内行きバスのターミナルとなっており、深夜まで運行。学生が図書館を活用しているはずだ。大阪市立大学も全国に誇る図書館(学術総合情報センターの呼称)だが、学生の利用率では格段の違いである。今では一般化した入館者バリアーではあるが開架式書架コーナーに入るのにカードは不要。一通り全館を回ってみた。特に日本語で書かれた本が新しいもの、古いものも多い。2階フロアの3分の1位だったのだろうか。私の10年前に出した翻訳本も見つけることができた。済州島での唯一の国立総合大学(大学校と呼称)、11学部(大学collegeと呼称)音楽、美術関係の課程もあり、医学部もあるのだから当然なのだろう。もっとも、医学部基礎研究部門の建物はキャンパス内だが、病院は市内にあるとのことで、中央図書館の機能は貧弱な様子に見受けられた。

総じて、学術印刷物に関する利用率は学生の質を見る、いわばインデックスになると思うのだが、日本との差は歴然とみた。出版に関係するものとして日本の状況を、やや憂いている。

それに引き換え、学内にある書籍店は広いフロアに教科書が山積みになされ、人っ子ひとりいない。もちろん、ほとんどがハングル文字だからどんな本か分からない。教科書販売所の様相を呈していた。書店はすべからく「新刊本の図書館」であって欲しいと思うのは私一人ではないと思うのだが。

何人かの友人教授から聴いたのであるが、ここ韓国でもアニメ、まんがの浸透普及とコンピューター利用が、急速な学生の本離れを来しているとのことであった。この先、活字文化はどう進むのか、また我々はどう対応すべきなのか。

今こそ書物の力が必要

サイエンスアシスト
渡邊喜美子

先日、ある科学フォーラム運営の手伝いをしました。タイトルは、『みる-見る、観る、視る、診る』で、様々な観点から物事をみることを意味を考えようというもので大変興味深いフォーラムでした。そのなかで、一人の武道家の演舞と講演は、人にとって言葉が精神活動のために如何に重要かを指摘するものでありそれに伴う多くのことを学ぶことが出来ました。その武道家は、武道の技を仕掛けるときに相手が動いてから動いていたのではその技は間に合わない。つまり、目で確認してから動いたのでは話にならず、相手の『動く』という『気』を捉えて動くことが重要と指摘されました。人はまず気持ちが動いてから体が動くものであり、そのことを知ることによって活路が見出せるということなのです。その気持ちは呼吸に現れるので、それを感知する術を身につけることが武道の稽古なのです。勿論、呼吸は見えませんので、敢えて言えば相手が呼吸をするときに発する声を伴った『言霊』ではないかと話されたのです。

古来、我が国では、言葉には何か霊的な力が宿ると信じられ、それを言魂と表現していました。そのため、声に出した言葉が現実の事象に対して何らかの影響を与えると信じられ、良い言葉を発すると良いことが起こり、不吉な言葉を発すると凶事が起こると考えられて来ました。そのため、祝詞を奏上する時には絶対に誤読がないように注意されましたし、いまでも結婚式などで忌み言葉を避けるのはこの考えに基づくものであると思われれます。『万葉集』に柿本人麻呂が「志貴島の日本（やまと）の国は事霊（ことだま）の佑（さき）はふ國ぞ福（さき）くありとぞ」、山上憶良が「そらみつ大和の國は 皇神（すめかみ）の厳くしき國 言霊（ことだま）の幸ふ國と 語り継ぎ言ひ継ぎひけり」と詠んでいます。これらの歌は、我が国では古く「言」と「事」が同一の概念だったことを示しています。こうしたことが、日本人が『言動一致の高い精神性』を保ってきた大きな理由だったのでしょう。

それにつけても、最近では、若者を中心に大いに言葉が乱れ、あぶくのように消えてゆく言葉が流行に乗って使われています。また、自分の意志をはっきりと声に出して言うことを極端に恐れる若者も多くなっています。こうした言葉を粗末に扱う風潮

が日本人の心の在り様をあやふやなものにしているのです。やはり、人の心を育てる肥料は、美しく情感溢れる言葉であり、書物にはその力が宿っているのではないのでしょうか？

新刊書の紹介



OMUP ブックレット No.13

「堺・南大阪地域学」シリーズ 7

南大阪の万葉学

村田 右富実（大阪府立大学教授）

廣川 晶輝（甲南大学准教授） 共著

ISBN978-4-901409-36-0

定価：800 円＋税

南大阪の万葉故地を万葉集に詠まれた歌を解説しながら、万葉和歌と風土の

深いつながりを紹介した秀作

大阪公立大学共同出版会事務局

大阪公立大学共同出版会は、大阪市立大学、大阪府立大学の教職員と、本出版会の趣旨に賛同する者の自主的な参加を得て、研究・教育成果の発表を助成し、また民間出版社において採算上刊行を引き受けられないような優良学術図書の刊行頒布の事業を行い、学術の振興および文化の発展に寄与することを目的とし、

- (1) 会員の教科書および学術研究報告の刊行頒布
- (2) 会員の学術図書の刊行頒布
- (3) 会員のデータベース、ソフト等電子出版物の刊行頒布
- (4) その他前条の目的を達成するために必要な事業

などをおこなっている NPO 法人です。参加を希望される方は下記事務局へお問い合わせください。

599-8531 大阪府堺市中区学園町 1-1

大阪府立大学内

NPO 法人大阪公立大学共同出版会(OMUP)事務局

電話：072-251-6533

ファクシミリ：072-254-9539

e-mail：omup@hs.osakafu-u.ac.jp

URL：http://www.omup.jp/

入会金：一口一万円

振込先：三菱東京 UFJ 銀行 中もず支店 普通 3976510

編集後記

この冬は暖冬と予想されていましたが、例年になく美しかった秋の紅葉に引き続いて、この数年では一番冬らしくなっています。暖かい布団から出られず億劫になっていた朝の散歩もピリッとした空気の気持ち良さに誘われて再開しました。それでも子供の頃、毎日のように踏んでいた霜柱が出来たことが TV

ニュースになって流れるのですから随分暖かいのでしょうか。

温暖化対策としての CO₂ ガス排出削減が、先進国と発展途上国の意見が食い違って解決の目処がつかないようです。美しい四季を歌に詠んだ万葉人の豊かな心を引き継いでいる私達が大きな役割を果たす時なのではないのでしょうか？ (kmk)